

エミリー・デュ・シャトレの『火の論文』(1744)異本について

川島慶子*

1. 『火の本性と伝播についての論考』(1744)の異本の存在

デュ・シャトレ夫人の生前に出された最後の著作、1744年版『火の本性と伝播についての論文』(以後『火の論文』と略す)には¹, 様々な異本があることが判明した。きっかけは、この本について『本誌』に掲載した拙論に関して², そこに画像を提供してくれたアメリカの古書コレクターであるスメルツァーとさらなる議論をしていた時のことである。途中で議論がかみ合わなくなった。はじめは「私の英語力が低いからか」とも思ったが、そういう問題ではなく、お互いの持っていたテキストが異なっていることが判明したのである。なんとデュ・シャトレが1744年に出版した『火の論文』には、少なくとも3種類の異本があることがわかったのである。

そこで、ここに「広場」を借りて、まず私がデュ・シャトレ研究の面から、先の拙論に追加修正を行うと同時に、古書の製本技術の専門家でもあるスメルツァーにも、「製本」という側面から1744年版『火の論文』についての解説を書いてもらうことにした。

2. 『火の論文』には何種類の異本があるのか

拙論でも述べたことだが、1744年版『火の論文』は、1738年のパリ科学アカデミーのメスレー懸賞で次点になった「火の論文」を書き直し、デュ・シャトレ自からが出版した本である。私は、この本にはその他に、彼女が1741年当時のアカデミー終身書記であったドルトゥス・ド・メランとの間に起こした活力論争「シャトレ＝メラン論争」の2論文も追加されている、つまり3つの論文が含まれていると記した³。じっさい、アメリカのデュ・シャトレ研究者、ジュディット・ジンサーが著したデュ・シャトレの伝記でも、この本は同様の構成を持つものである旨が述べられている⁴。しかしスメルツァーが所蔵する『火の論文』はこうした構成をしておらず、パリのフランス国立図書館の『火の論文』

* 名古屋工業大学大学院

連絡先：〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 名古屋工業大学 おもひ領域
kawashima.keiko@nitech.ac.jp

は、さらに異なっていることがわかった⁵。

そもそもこの本には目次がない。そこで、スメルツァーと共に調査した結果、彼の解説にもあるように、この本には異なる4つの要素が存在し、それがさまざまに組み合わされた結果、数種の異本が存在することがわかったのである。

4つの要素とは以下のようなものである：

- ① 「書籍商の見解」－多くの版では、序文として本の最初に挿入されているが、そうでないこともある。ページ番号は記されていない⁶。
- ② 「火の論文」－メスレー懸賞論文を書き直したもの。1739年初出⁷。
- ③ 「メランの手紙」－活力論者デュ・シャトレが書いた『物理学教程』21章への反論として、運動の量派であるメランが書いた論文。ページ番号は独立に振られている。1741年初出⁸。
- ④ 「デュ・シャトレの返事」－③に対するデュ・シャトレの再反論を書き直した論文。ページ番号は独立に振られている。1741年初出⁹。

フランス国立図書館の版や、フェルネーの国際18世紀研究センター編集のデュ・シャトレの大部の研究書にある著作目録の版は「①+②」であり¹⁰、スメルツァー所蔵の版は「②+③」、私やジンサーの版は「①+②+③+④」である¹¹。スメルツァーが述べているように、④は③への反論なので、③抜きで④があるものは（製本間違い以外は）ありえないであろうから（②のない可能性はタイトルそのものが成り立たないので、最初から除外）、収録論文という意味では「②」、「②+③」、「②+③+④」という3種類の『火の論文』が存在し、それに①があるものとないものがあるので、①を含めると最低6種類の版が存在すると考えられる。ここに①の位置の異同を考慮すると、さらに多くの異本を数えることができる。

3. 「書籍商の見解」の意味

スメルツァーは①「書籍商の見解」に重きを置かず、異本は3種類と考えていと述べている。しかし私は、彼のこの主張には意義を唱えたい。というのも、科学的内容だけで考えると①に大きな意味はないが、1744年版の『火の論文』出版にあたってのデュ・シャトレの気持ちを知るためには、①は重要な史料となるからである。

これについては拙論でも示唆したが、本稿の付録につけた①「書籍商の見解」の全訳から明らかなように、①にはこの本を出版する意義や、②「火の論文」の作者を知るための材料が含まれている。本としての『火の論文』には作者の

名前が記されていない。18世紀のヨーロッパでは、それが政治、宗教的に危険な文書でなくとも、高い身分の著者は名を伏せることが珍しくはなかった。特に女性の場合は、当時のジェンダー規範から、それが真剣な主題の本であればあるほどに、その名を秘めることが暗黙の了解となっていた。だから、『物理学教程』の作者と火の論文の作者は同一人物であるという旨の①の文章がないと、読者には②の作者が誰かわからない¹²。したがって、①がありながら、論文としては②しか載せていない国立図書館の版は非常に中途半端なものである。というのも、第一に、①にはこの本に③と④が含まれると書いてあることから、実際の内容と矛盾する。第二に、少なくとも①と③（表題に『物理学教程』の作者はデュ・シャトレ夫人であることが明記されている）がないと、②の作者がわからないからである。ただし、①には『物理学教程』の著者が「彼女(elle)」と記されているので、②「火の論文」が女性の論文であることだけはわかるようになっている。

この本を出版する意義という問題については、これに関するデュ・シャトレの手紙などが発見されていない現状では、①はきわめて重要な史料である。ここで書籍商は、すでにアカデミーの雑誌に掲載された「火の論文」を、新たに独立した本として出版することの意味を、「公衆の喜びとなる」からと述べている。ここには明らかに、懸賞の時からデュ・シャトレの野心が透けて見える。たしかにアカデミーの雑誌は当時の大きな権威ではあったが、なにせ部数が少ないし、彼女の論文にだけ注目しているわけではない。デュ・シャトレは常に科学における真の名声を渴望していた。だから少しでも多くの人目に触れるように、もう一度この論文を出したかったのである。

さらに、①には書かれていないが、デュ・シャトレが『火の論文』を出したかったもう一つの理由がある。これも拙論の繰り返しになるが、彼女は論文執筆時と異なり、アカデミーの雑誌の出版時には、運動の量派から活力派へと、その科学的立場を変えていた。だから再出版には、最初から完全に活力派に立った観点からの、新たな「火の論文」を出したかったという事情も存在していた。

③と④を挿入する事情についても、そこには書籍商だけではなく、デュ・シャトレ自身の意思が働いていたことが①から判明する。なぜなら書籍商は「〔著者自ら〕『返事』の版の残部を当方に提供してくれた」と述べているからである。したがって私は、「①+②+③+④」の版がこの本の完成形であると考えられる。そして拙論の結論、つまりこの組み合わせには、科学アカデミーに対するデュ・シャトレの複雑で強い感情が反映されている、という説は、①だけからでも窺い知ることができると考えている。

加えて、③のメラン論文はさておき、デュ・シャトレ自身の論文である②と

④はともに、大幅に書き直されている。しかもその書き換え方は、拙論でも分析したように、彼女自身の科学思想の変遷や、科学における野心に合致している。書籍商が本人に無断でこのように書き換えて挿入したとは考えられない¹³。それはデュ・シャトレが1744年版『火の論文』を友人、知人に送りまわった事実から考えても明らかである。したがってこの本は、拙論の繰り返しになるが、デュ・シャトレの長年の望みが結晶した作品なのである。

ただし、今回の異本の存在の確認と、スメルツァーの解説を読んだ結果として、拙論に追加、修正したいことがある。それは、『火の論文』の完成系が「①+②+③+④」であるにせよ、デュ・シャトレや書籍商（『物理学教程』を出版したのと同業者）は、最初からこの構成で製本しようと考えていたわけではないということだ。というのも、スメルツァーが確認したように、②と③と④はそれぞれ活字も異なり、紙（④の紙については確定していないが、その可能性は高い）も別である。また、ページ付けもそれぞれ独立している。①ですらこれらとは別に刷られた可能性がある。デュ・シャトレの他の本ではこのようなことはない。初版の『物理学教程』（1740）も、『メランへの返事』（1741）も、「シャトレ＝メラン論争」を含む『物理学教程』第2版（1742）も、最初から統一した計画のもとに編集、印刷されている。一部分異なる紙を使用していたり、ページ付がばらばらなどということはない。つまり彼女の本としては、『火の論文』は異例のものなのである¹⁴。

こうした、微細な違いとは言いがたい多くの異本を産んだ理由は何なのか。最初は②のみが含まれる本として『火の論文』は構想された、というスメルツァーの予想は、活字や紙の違いを考慮すると、妥当な推論であると考えられる。それがどういう経緯でデュ・シャトレが④を書き直し、その説明のために③を挿入することにしたのか。そして③と④については、『物理学教程』の第2版に明らかのように、これらはセットにしてこそ、活力論争として意味のあるものである。それなのになぜ、スメルツァーの所蔵するような、④がなく③だけが追加されている版が存在するのか。そして①はどの時点で構想され、印刷されたのか。

これらの謎については、残念ながら現在のところそれを確定する史料がないので何とも言えない。拙論でも述べたが、この時期のデュ・シャトレは公私にわたり多忙であった。そのためせめて1738年の②「火の論文」だけでも書き直して先に出したいと思ったのかもしれない。ところが、時間ができたので④「返事」も書き直して③「手紙」と合わせて追加したのだろうか。あるいは時間の有無とは無関係に、あとになって活力論争を追加することを思いついたのだろうか。

確実なことは、デュ・シャトレは最終的に、自分と科学アカデミーが関係し

た、すでに出版されたふたつの論文を書き直して、それをもう一度一冊の本として公にすることに意味を見出したということである。「アカデミーの懸賞の雑誌は、小数部しか刷られなかった。[...]そこで当方としては、同じ著者による『物理学教程』と同じ大きさの版で、この論文を世に出すことは公衆の喜びとなると考える」という書籍商の見解は、「私は人々がこの愉快的逸話〔シャトレ＝メラン論争〕のことを忘れてほしくないのです」とモーペルティエに書き送ったデュ・シャトレの気持ちを代弁するものである¹⁵。

いつかどこかで何かの史料に出合い、この異本問題が解決される日が来るかもしれない。それまでは、1744年版の『火の論文』は、デュ・シャトレの作品の中では、多少謎めいた本として存在しつづけるであろう。

付録「書籍商の見解」全訳¹⁶

この「火の論文」は、1738年の科学アカデミーの懸賞論文に応募するために書かれたものである。この論文は賞こそ獲得しなかったものの、アカデミーは、これともう一つの論文とを受賞論文と共に印刷し、自身の雑誌に載せる価値があると判断した。

この追加された二論文の直前にあるアカデミーの緒言によれば、アカデミーは次のような事情からこれらを印刷に付したと説明している。それは「懸賞の審査委員会の証言によると、火の本性という当該の課題に関しては、これらの論文は特に新しい知見を付け加えるものではないが、これらは応募された論文の中では最良のものであり、それぞれに多数の文献を網羅しており、自然学の良書のすぐれた知識を披露し、多くの主題を扱い、そうした主題を見事に解説し、十分な洞察力を備えている」というものである。

しかしながら、件のアカデミーの懸賞の雑誌は、小数部しか刷られなかった。その上、ほとんどはアカデミー会員に配布されておしまいである。そこで当方としては、同じ著者による『物理学教程』と同じ大きさの版で、この論文を世に出すことは公衆の喜びとなると考える。当方は本書に、メラン氏がこの著者に宛てて出した活力に関する1741年の「手紙」と、著者の「返事」を付け加えた。彼女〔著者〕は〔「返事」の〕執筆当時ブリュッセルに滞在していたのだが、そこで出版した「返事」の版の残部を当方に提供してくれた。〔いがみ合うことなく〕当事者が互いに学びあう結果のみをもたらすようなこの手の論争は、ほかのどんな作品よりも、哲学の進歩に貢献することができるものである。

付記:本研究は、「科学アカデミーと女性」に関するふたつの科学研究費補助金(基盤(C):19510273, 23510347)の助成を受けた研究である。

¹ Émilie du Châtelet, *Dissertaion sur la nature et la propagation du feu*, (Paris : Prault, 1744).

² 川島慶子「科学アカデミーに挑んだ女：エミリー・デュ・シャトレと『火の論文』(1744)出版の意味」『本誌』Vol.40-1(No.142): 1-19.

³ *Ibid.*, p. 2. 私の『火の論文』はアメリカのHoughton Library所蔵の版のマイクロ・フィルムである。

⁴ Judith P. Zinsser, *La Dame d'Esprit, A Biography of the Marquise Du Châtelet* (New York: Viking, 2006), p. 353.

⁵ <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k756786.r=Chatelet+Dissertation+1744.langFR>

⁶ この時代は、書籍販売業者と出版社はほぼ同じ意味である。つまり、たいいていの本屋は、みずから出版社と印刷屋と本屋のすべての業務をおこなっていた(もちろん書店では、ほかの業者が出した本も売っていた)。したがってここでは、そうした業者に対して「書籍商」という訳語をあてた。

⁷ Émilie du Châtelet, “Dissertaion sur la nature et la propagation du feu,” *Pièces qui ont remporté les prix de l'Académie Royale des Sciences, En M.DCCXXXVIII* (Paris : Imprimerie royale, 1739) : 85-168. 懸賞は1738年に行われ、雑誌は翌年の1739年に出版された。

⁸ Dortous de Mairan, *Lettre de M. de Mairan, Secrétaire Perpétuel de l'Académie Royale des Sciences &c. A Madame ***. Sur la Question des Forces Vives, en réponse aux Objections qu'elle lui fait sur ce sujet dans ses Institutions de Physique* (Paris : Charles-Antoine Jombert, 1741).

⁹ Émilie du Châtelet, *Réponse de Madame ***. à la Lettre que M. De Mairan Secrétaire perpétuel de l'Académie Royale des Sciences lui a écrite le 18 Février 1741. sur la Question des Forces Vives* (Bruxelles : Foppens, 1741).

¹⁰ Ulla Kölving et Olivier Courcelle, eds., *Émilie du Châtelet, éclairages & documents nouveaux* (Ferney-Voltaire: Centre international d'études du XVIIIe siècle, 2008), p. 346.

¹¹ オックスフォードのヴォルテール研究所編集の雑誌『ヴォルテール研究』のデュ・シャトレ研究特集にある著作目録の版も、④が含まれているとあるので、私のものと同様ではないかと推察される。少なくとも「②+④」であることは確かである。また、スメルツァー説(③抜きで④はありえない)を採用すると、少なくとも「②+③+④」の版と推定される。Judith P. Zinsser and Julie Candler Hayes eds., *Emilie Du Châtelet: rewriting Enlightenment philosophy and science, Studies on Voltaire and the Enlightenment*, 2006: 01 (Oxford: Voltaire Foundation, 2006), p.315.また、この号以前に出版された、やはり『ヴォルテール研究』掲載の「シャトレ＝メラン論争」に関する論文でも、『火の論文』(1744)には往復書簡が含まれていると書かれているので、これも少な

くとも「②+③+④」の版を参照している。Robert L. Walters, “La querelle des forces vives et le role de Mme du Châtelet,” in François de Gandt présenté, *Ciray dans la vie intellectuelle, Studies on Voltaire and the Enlightenment*, 2001 : 11 (Oxford : Voltaire Foundation, 2001) : 198-211, p.210.

¹² 『火の論文』と同じ書籍商 (Prault) から出された『物理学教程』初版 (1740) は匿名で出版されたが、オランダで別の本屋から出版された第2版 (1742) には作者名が明記されている。したがって、このことを知っていれば、①があれば②の作者が誰だかわかる。しかしそうでなければ、①と②だけでは②の作者名がわからない。『物理学教程』の作者名が明記されている③があつてはじめて、①から②の作者が特定できるのである。

¹³ 書籍商が著者に無断で内容を書き換えたり、追加したりして本を出版すること自体は、当時ままある現象であつた。たとえばヴォルテールの有名な『ニュートン哲学要綱』 (1738) では、最初の版にはオランダの書籍商が、ヴォルテールに無断で第三者に書かせて付け足した章が存在し、ヴォルテールがこのことに激怒したのは有名な話である。Robert L. Walters and William H. Barber, “Introduction,” in Voltaire, *Éléments de la philosophie de Newton, Les oeuvres complètes de Voltaire*, Vol. 15 (Oxford: Voltaire Foundation, 1992), pp. 59-80.

¹⁴ ただし、『物理学教程』 (1740) には、扉絵のあるものとないものがあり、挿絵に関しても、すべての版の挿絵が同じではない。ただし本文は同じである。『物理学教程』第2版 (1742) にはメランの「手紙」とシャトレの「返事」が初出の文章のままで追加されている。しかしここでは目次にもこれらの論文のことが出ているし、ページ付けも本全体で統一されている。これらを含む版の『火の論文』 (1744) のように、合本されたものではない。

¹⁵ Lettre 274, Émilie du Châtelet, introduction et notes de Théodore Besterman, *Lettres de la marquise du Châtelet*, 2 toms. (Genève: Portrait, 1958), tom. I, p. 63.

¹⁶ “Avis du Livraire,” Du Châtelet, *Dissertaion*, *op.cit.*, ページ番号なし。